私の心に残った本

「狂い」のすすめ

衛生学部教授
（解剖学）
肥田　岳彦

ひろさちや 著
集英社

ちょっと大きい本屋に入り、ふらふらと多くの本を眺めていたら一冊の本に目が止まった。「とんでもない題の本があるもんだ。“狂いのすすめ”とは、狂いなさいというのか。狂いとはどんな意味があるのか」と思わせる本である。著者のひろさちや氏は、東京大学文学部印度哲学科卒、同大学院博士課程を修了した仏教学の専門家であり、仏教思想家として人生論をわかりやすく説いている。人生に意味なんてありません。「生き甲斐」なんてペテンです。と本の帯にある。

世の中をすいすいと泳いで生きていけるのであれば、何も思想・哲学を必要としない。強者にとっては世の中が味方になってくれます。だが、弱者にとって世間は冷酷です。ストレス社会における社会的ひきこもりの大量出現にはさまざまな要因があるが、若者（学生）が社会（学校）という一様な環境にいつまでも留め置かれる事実が考えられる。社会心理学的にみて特異な現象ではなく、高学歴社会に対して現代日本の普通の若者が陥っている倦怠気分そのままである。また、格差社会をめぐる議論がこのところかまびすしい。この背景には、私たちのあいだに実感として労働条件の悪化や社会的保障・サービスへのアクセスの困難が感じ取られてきたことがあるだろう。だから、弱者は、ちょっと世の中を違った方向からみたらどうであろうか。

この本では、室町後期に編纂された閑吟集（かんぎんしゅう）から《何ともなやなう　何ともなやなう　人生七十古来稀なり》“何ともなやなう”とは、どうにも仕方がないな・・・といった意味です。また、こんな歌が紹介されています。《お殿さまでも家来でも、お風呂に入るときゃみな裸、裃（かみしも）脱いで刀も捨てて、歌の一つも浮かれでる》著者はこの歌を「ただ狂え」の哲学と名づけています。この哲学でもって世間と闘ってみよう。そうすると、きっと視界が開けてくるだろうと説いています。わたしたちは、「狂う」という武器を考え、わたしたちはみずから「狂う」ことによって世間のくびき（自由を束縛するもの）から自由になれるのです。世の中を一方方向から見るのではなく、ちょっと違った視点から見てみると、もっとのびのび、のんびりと、安らかに生きられますよ。あなたの人生は、あなたのものではありませんか。それを世間に気兼ねしながら生きるなんて、もったいない。

この本は、仏教・イスラム教・キリスト教などの教えを引用して「狂いのすすめ」について、おもしろおかしく読者を楽しませてくれます。きっと肩の荷がおりますよ。

（当館所蔵　分類番号159）